



やまいの根を切るために



真明

発行所

天理教 芦津大教会

〒546-0003

大阪市東住吉区

今川8丁目6番32号

電話 06 (6702) 1980

FAX 06 (6700) 1854

Eメール shinmei@ashitsu.or.jp

印刷所 天理時報社

たん／＼とよふぼくにてハこのよふを
はしめたをやがみな入こむで 十五号
このよふをはじめたをやか入こめば
どんな事をばするやしれんで 十五号

61

60

みかぐらうたに、「やまひのもとハこゝろから」(十下り目十下)とお聞かせいただくように、「ほこりの心」「いんねん」という、目に見えない部分が病の根となります。この根を切っていただくのが、おさづけの取り次ぎです。

私たちがおさづけを取り次ぐ中で、一度では鮮やかな御守護が見られない時もあるでしょう。病の根には浅いものもあれば、深いものもあります。一度ですつと抜けるものもあれば、四方八方に強固に張られている根もあります。重い病気やけがであれば、一度のおさづけで全ての病の根を切ることは難しいかもしれませんが、おさづけを取り次ぐたびに、少しずつ確実に病の根は切っていただいているのです。重い身上の方には真剣にたすかりを願ひ、足しげく通って何度もおさづけを取り次ぐことが大切です。

病気やけがを治すのは、人間の力ではありません。神様がお働きになって病の根を切ってくださいからです。私たちがようぼくは、「いかに神様に働いていただけるか」を心に置いて、普段から自らの心のほこりを払う努力を続けながら、根気よくおさづけを取り次ぎせていただきます。

四方正面

4月29日の全教一斉ひのきしんデ1。西日本では今年も雨が降り、多くの会場で中止や延期となった。私の支部は4年連続

となり、神様のなさることに文句をつけるわけではないが、勇んで準備や呼びかけに務めた人のことを思うと、「どう思うのか」という思いが頭をよぎる。

後日、延期された日に参加した折、支部長が表統領のメッセージを読み上げたのを聞いて、ふと思った。「ひのきしんは、常日頃からの心掛けであり、身をもつて行う報恩の実践」という言葉。もしかして親神様は、私たちにそのことを気付かせるために、雨を降らされるのではないのか？ ひのきしんデーだけがひのきしんではない、と。

ひのきしんに限らず、私たちの信仰は、知らず知らずの内に形骸化してはいないだろうか。改めて考えさせられる出来事であった。

積極的な信仰実践に努めたものである。

(教)

《4月次祭 挨拶》

一人ひとりが仕切り直しの精神で

御恩報じの思いを新たに

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、年祭活動の旬の御用の上に真心を尽くしておつとめくださいます。誠にご苦勞様です。また今日は、台湾から5年ぶりに教祖誕生祭への団参で37名が参拝してくださっています。これもまた大変嬉しいことであります。

今、2人の教会長さんから感話を聞かせてもらい、素晴らしい感話で心を勇ませていただきました。

最初に登壇した真大富分教会長・大喜信人君は、幼い頃の父親の出直しという大きなふしから、母親と共に大島分教会で御用していました。私が巡教に行くたびに、元気に走り回っている姿を目にしましたが、事情教会の復興の役を担って、子育ての大変な中、夫婦二人三脚で教会の御用をつとめてくれております。

感話にもありましたように、苦勞が多い中を、殊に子供たちが親の信仰を土台にすくすくと成長していることが実に微笑ましく思います。これも会長夫婦が陽気ぐらしの実践を日々心がけて、明るく勇んで通っている、その背中を子供たちが見て育ってくれているのでしょう。

また、若干21歳で恵庭分教会長に就任され、以来、道一条、たすけ一条につとめておられる荒木志朗さん。私も経験しましたが、若くして会長になった故の苦勞や苦心は並大抵なものではなかつ

たと思います。それから死を覚悟するような身上を2度患われ、2度とも不思議な御守護に浴するという体験をされました。感話にもありましたように、山田道弘・現當別分教会長の就任奉告祭に、ならん中どうでもこうでもの思いで奉告祭に参拝をされ、瘦せた身体で声を絞り出して地方を務めておられた姿が思い浮かびます。2度の鮮やかな御守護の陰には、45年間に及ぶ日参による日々の理と、親一条の信仰があつたのは間違いありません。ご本人もこの御守護を通して、これで間違いがない、これこそ確かな道であると確信をされたことでしょう。

昨年から月次祭の神殿講話に代えて感話を取り入れたのは、良い話を聞かせてもらった、と思うだけでなく、感話をする者が頂いた御守護を、共に喜ばせていただいて、自分自身の信仰の励みにさせていただくことにあります。

しかし、感話の目的は、励みにすることだけではありません。これについて別の視野から話をいたしますと、子育てにおいて、子供は日々成長します。日々成長しますが、身近にいればその成長には気付きにくいものです。これが1年ぶり、2年ぶりに会った他人の子供ならば、「随分と大きくなったね」と、その成長の跡は見取れますが、普段から一緒にいればなかなか分かりづらいのです。写真などで成長を見ることで、我が子もここまで大きくなったんだと感慨深くするのです。

親神様の御守護も身近なところにあります。日々身内や周囲に頂戴している御守護は、頭では理解しているものの、あまりにも身近な故、肌身を感じるのには難しいかもしれません。

御守護は「ありがたい」と、実感することで喜びが生まれると思いますが、それは主観的なものです。この御守護を実感するに

は、御守護を客観的に眺めることも必要になると思います。これまでの人生を振り返ってみる。もつと遡^{さかのぼ}って初代や代々の道まで振り返ってみる。「あんな御守護もあつた。こんな御守護も頂いた。難しい道もあつたけれども、その中をお連れ通りいただいたおかげで今の私がある」などと、これまでを振り返ることで、今ここにある御守護を身に染みて感じる事ができると思います。

親神様の御守護、教祖の親心に改めてお礼を申し上げることが、月次祭感話を始めた狙いの一つです。お互いに親神様の御守護にお報いし、教祖の親心にお応えできるように、御恩報じの思いを新たにさせていただきたいと思ひます。



年祭活動 2 年目に入つて、もう 4 カ月を迎えました。私自身、この 1 年 4 カ月を振り返ると、時句に相応しい十分な働きができているとはお世辞にも思へません。「年祭活動の三年千日は、非常時である、仕切つてつとめる旬である」と、前真柱様からよくお仕込みを頂きました。あとひと月半で年祭活動の折り返しになります。世界たすけの先頭に立つて私たちを導いてくださっている教祖の親心に、なんとしてでもお応えさせていただけるように、一人ひとりが仕切り直しの精神で、悔いなく年祭活動をつとめさせていただきたいと思ひます。

明後日の 18 日は、教祖には 226 回目の御誕生日をお迎えあそばされ、教祖誕生祭がつとめられます。当日参拝される方はおちばで、帰参できない方はそれぞれのところからおちばに心を寄せて、共に教祖のお誕生日をお祝いさせていただいて、成人をお誓いさせていただきますでしょう。

(要約)

立教百八十七年 四月 月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には世界一れつをたすけたいとの深い親心から、十全の御守護にお譲り下され、大難を小難に小難を無難にお導き頂きまして、陽気ぐらしへとお連れ通り下さいます親心の程は、誠に有り難い限りでございます。その中でも私共は、この道にお引き寄せ頂き、ようばくとしてたすけ一条の道を勇んで歩ませて頂いておりますが、茲に迎えた今日の吉日は、おちばよりお許しを戴きました芽出度き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、陽気に奏する鳴物に心を合わせ、座りづとめ、てをとりを勇んで勤めて、四月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には今日を大切な一日と参らせて頂きました芦津の道の子達が同じ思いに伏し拝み、一層の成人をお誓いする真心の状態をも御照覧下さいまして、親神様にもお祈り頂き、遍く御恵みをお垂れ下さいますようお願い申し上げます。

さて、教祖にはこの月の十八日には、二百二十六回目の御誕生日をお迎え遊ばされ、御本部にて教祖誕生祭を御執行下されます。思へば教祖には、親神様の世界たすけの思召のままに、筆舌に尽くせぬご苦労の道を心明るくお通り下され、たすけ一条の道をお付け下さいました。そして今尚御存命の理を以て、世界中の人々に親心をお掛け下さり、陽気ぐらしへとお導き頂いております。

四月の月次祭を勤めるにあたり、芦津に繋がる私共一同は、教祖の御誕生日を寿ぎ申し上げると共に、教祖の親心溢れるお導きに心から御礼申し上げ、ひながたの道を肝に銘じ、御存命の理にお縋り申し上げます。教祖百四十年祭へのたすけ一条の道を、仕切り直しの精神で、一手一つに勇んで進ませて頂く決心でございます。

何卒親神様には、道に尽くす誠真実の心を大らかな御心にお受け取り下さいまして、よろづたすけの御守護のまに／＼時句の道をお連れ通り下され、伸びゆく理の栄と共に、世界の人々の心が澄み渡り、神人和楽の陽気づくめの世の状に一日も早くお導き下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《4月月次祭 感話》

親一条の心を忘れずに

恵庭分教会長 荒木志朗

人救けから始まった日参

私は21歳で教会長のお許しを頂いて現在で45年になりますが、今感じていることは、「日参のありがたさ」上級、親の声に沿わせていただくことの大切さ」教祖年祭の句は、私たちのための句である」ということです。

私の日参のきっかけは、会長に就任して早々の月次祭に、あるご婦人のようぼくが、教会からしばらく離れていたご婦人を連れて参拝に来られたことから始まりまして。その方は、両手の指先が変形して、左の膝が曲がらず、1人での歩行も困難な状態でした。

当時の私は、身上に対する教理が分からず、「本にはこのように書いてあります」と言うことくらい

しかできませんでした。

上級である當別の会長様が、「志朗にはまだ救ける理がないから、神様に働いていただくために、1カ月間當別に日参を、2人の婦人さんは恵庭に日参をするように」と言われたのです。

そして、私は上級に、2人は私の教会へと日参が始まりました。

数日経つと、「階段の上り下りも楽になり、痛みも薄れてきました」とのことと、神様の不思議を見せていただき、共に喜ばせていただきました。このおたすけがご縁で、1カ月の日参が、1年、やがて3年、とうとう45年の日参を続けることになりました。

私の教会から當別分教会までは33キロあり、車で約45分かかりますが、当別町は豪雪地帯で、吹雪

の日は命がけになります。「今日はやめよう」と思った日も幾度もありましたが、そのたびに増井りん先生の「雪の日」の、逸話を思い起こしました。

そうして上級の朝づとめから、午前中は伏せ込みのひのきしんという日参の毎日を送って45年間。振り返ると、人だすけから始めたこの日参で、私は2度の奇跡の御守護を頂きました。

句に頂いた大きな節

最初の御守護は、23年前、43歳のとき、當別分教会現会長様の就任奉告祭の句でした。

ある朝、ヒゲを剃っているときに、あごの下にシコリができてくるのに気付きました。近くの病院を受診すると、医者は驚いた表情を浮かべて、「すぐに大きな病院を紹介するから」と言いました。机の上の診断書には「悪性リンパ腫の疑い」と書かれていました。その日のうちに国立がんセンターで受診したところ、血液のがんで「悪性リンパ腫」とのこと。しかもス

テージ4の末期で、まさに死の宣告を受けたのです。

入院後、抗がん剤での治療が始まりましたが、薬の副作用で苦しみ、体力も気力もなくなり、ただただ祈るばかりでした。治療を続ける中、上級の会長就任奉告祭が近づいていました。

病院では、いても立ってもいられない気持ちでした。「部内会長として、何としても奉告祭のおつとめには出させていたきたい。もしかすると、上級での最後のおつとめになるかもしれない」との思いでいましたが、体調はなかなか良くなりません。

会長という立場上、「人をたすけて我が身たすかる」と人にはよく申します。けれども、同じ病棟の方が次々と出直されていく中で、「もし俺が出直したら、小さな子供たちや妻はどうなるのか」と、頭によぎるのは自分自身のことばかりで、情けない日々の繰り返しでした。これではダメだと、同じ病棟で苦しんでいる人のたすかりを願うよう、心に決めました。



そして迎えた奉告祭当日、病院に外出許可をもらい、妻に連れられて奉告祭に向かいました。抗がん剤で体中の毛が抜け、やせ細った姿でしたが、命がけでおつとめを勤めさせていただきました。

ところがこの奉告祭の後、厚生労働省から認可が下りたばかりの新薬での治療に切り替えることとなり、これが功を奏しました。これまでとはうって変わって、がんに対する効果が表れ始めたのです。この薬がタイミングよく認可されて使えるようになったのも、私はただの偶然ではないと思います。入院している間、上級では十二

下りのお願いづとめを勤めてくださり、その中には大病を患って退院したばかりの方が、遠い道のりを歩いて通ってくれていました。

上級の奉告祭という旬のおつとめ、皆さんの真実のお願いづとめ、毎日のおさづけに、親神様がお働きくだされて御守護を頂けたのだと思います。おかげさまで、8カ月近くの入院生活を終え、奇跡的に命を繋いでいただきました。

神様の用向に

退院後、しばらくの間は体力も気力も落ち、不安は消えず、以前のように日参もできず、ただ悶々とした毎日を送っていました。そんなある日、當別の前会長奥様から「あなたには、日参しかないのよ。日参はすぐには目に見えた結果が出てこないけれど、ここぞという時に必ず御守護を頂けるのが日参という真実の種。今まで積み上げてきた日参の理と徳で身上の御守護を頂いたのだから、これからは人のために、教会のために日参をしなさい」と、お話を頂きま

した。不安を抱えながら、心を振り絞る思いで日参の再開を決心しました。

その後も、年に2度の検査を受け、「今回も大丈夫だった」と胸を撫で下ろしながら、1年2年と日参を続けました。

13年が経ち、2度目の命の危機が訪れました。教祖百三十年祭への年祭活動の旬、腫瘍マーカーの数値が高くなりました。心の中では、「大丈夫だろう」と願っていましたが、がんの再発でした。悪性リンパ腫は再発のほうで死亡率は高く、再発してたすかることはまずないとも言われています。告知を聞いた病院の待合室で、真剣に考えました。「神様、俺は何か悪い心づかいをしましたか」と、神様に対して腹の立つ気持ちをぶつけることもありました。御守護を頂いてからこれまで、上級への日参も、ひのきしんも、路傍講演も、神様の御用を積極的勤めてきたのに「なぜなんだろう」と。

いろいろ思案をしていると、大

て、大きなおつくしの心定めをされたことが心に浮かんできました。「年祭活動仕上げの年にやることはこれだ。1度死にかけた命、これしかない」と、思ったのです。

教会に戻り、主立つ信者さん方のがんの再発を伝え、「来年仕上げの年の1年間の心定めを、1月の春の大祭に、たとえ借りてでもお供えさせていただきたい」と、申し上げました。当時おぢばで勤務している長男、関東で保育士をしている長女も冬休みで帰っており、子供たちが揃っていたので、がんの再発と心定めを伝えました。

當別の会長様にも報告させていただくと、早速足を運んでくださり、「会長さんであり、お父さんの身上を御守護いただくために、親神様、教祖に受け取っていただける心定めをして通らせてもらおう」と、子供たち一人ひとりにお話をしてくださいました。

年明け早々、子供たちが揃って私たち夫婦の前に来て、「これは4人から心定めのお供えです」と渡ししてくれました。自分たちに出せ

る精いっぱい、私のたすかりを願って、心定め達成の上にすぐ実行に移してくれた真実に、私も家内も胸がいっぱいになりました。

その後、病院からすぐ治療に入ると連絡がありました。まずは、上級、大教会、ご本部の春季大祭で親の理をしつかり頂きたいと、おちばへ帰らせていただき、心の底から神様にもたれる心で治療に入ることにしました。

大教会の大祭に帰らせていただいた際、大教会長様から「おふでさき1千711首のお歌の中には、用向（ようむき）と言う言葉が2首だけ出て来るんです。

いかなるのやまいとゆうてないけれどもにさわりつく神のよふむき

四号 25

神様の用向に使っていただけののだから、身上は安心してください」と、ありがたくもったいないお言葉をかけていただきました。

おちばから帰って入院し、2月から抗がん剤治療が始まりました。すると担当医が、「抗がん剤と相性がいいですね。首、胸部のリンパ

節の腫れが半分になりました」とのこと、退院して、自宅から外来受診で治療ができるようになりました。前回は副作用で大変な苦しみを味わいましたが、今回は副作用もなく、上級への日参やひのきしんも普段通りさせていただきながら治療をし、わずか3カ月で寛解の御守護を頂きました。

親の身上をきつかけに

この節に、おちばで勤務していた長男が、毎月の月次祭に帰って来る心を定めてくれました。

親が子供に信仰を伝えることは、なかなか簡単にはまいりません。

17年前は子供たちもまだ幼く、神様の思いは理解できない年齢でしたが、17年の時を経て子供たちも成長し、親の身上をきつかけに、自ら神様と向き合う心になり、真実の心を使い、信仰を学んでくれました。

会長として、親として、子供の成人が何より嬉しい御守護だと感じます。現在、こうして親神様、教祖に命を繋いでいただき、毎日

を結構に通らせていただいています。これも、親々がならん中を人だすけに伏せ込んでくれた真実の種があつてのお陰でしょう。

そして、道を通していただく中に、日々の理づくりの大切さ、上級、大教会、ちばと親の声に沿った御用をつとめることのありがたさ、旬々におかけいただく教祖の大きな親心を感じています。

教祖の口伝に「暗闇は声を頼りにしてこい。末はたのもし道があるぞや」というお言葉があるそうです。

親の声、年祭の旬に心を合わせ、親一条の心を忘れずに、神様への感謝、御恩を報じることの大切さを子供たちに伝えながら、「あ」とき、両親が道の上に、人様のたすかりの上に、真実を込めて通ってくれたお陰だ」と、思ってもらえるように通らせていただくこと、心を引き締めて年祭活動を進むことを心に誓わせていただき、お話を終えさせていただきます。

(要旨)

紆余曲折を経て今日の姿に

真大富分教会長 大喜 信人

大喜家の信仰は、祖父・大喜續

教会設立の御守護を頂きました。

夫が長年肺結核を患っていたところ、大島分教会の布教師のおたすけで御守護いただいたことに始まります。その後、布教所を開設し、祖父を初代会長として、吐瀉とが喇ら分

父・大喜守人は母と結婚後、教祖百年祭の年祭活動の最中、結婚11年目にして私が生まれ、信者さん方も孫のように可愛がってくれました。教祖百年祭も勤め終えられ、

私が3歳の時に父は二代会長に就任しました。

しかしその翌年、交通事故により父が出直すという大きな節を見せていただきました。さあこれから、というときの突然の出直しに、母は、心の整理がつかなかったと聞きました。

先人のこれまでの伏せ込みと御恩を忘れぬよう、教会を引き受けようと思ったこともあったようですが、当時の状況ではとても受けることができませんでした。その

とき、大島の会長様に「大島で伏せ込んでみてはどう？」と言われ、理の親の言葉に、とても温かく包み込まれたように感じた母は、実家のある奄美大島へ帰り、大島分教会への伏せ込みが始まりました。

私も幼稚園からまっすぐ母のいる教会に帰り、休みの日は手を繋いで一緒に参拝に行きました。母と手を繋いで教会に行くことが、唯一の楽しみの時間でした。

高校へ進学すると、教会から通うこととなり、それをきっかけに母も一緒に教会へ住み込むことに

なりました。高校時代、他人に迷惑をかけては大島の会長様、奥様に親代わりとして厳しくお仕込みいただきました。

高校を卒業した後の進路に迷っていたとき、修養科を勧められて入科。修了後は本部の境内掛で4年間伏せ込み、その中で自分の心がお道の方向へと大きく変わったように思います。

そして境内掛勤務を終え、23歳のときに島へ帰り、再び親子で大島分教会での伏せ込みが始まりました。私は子供が大好きなので、少年会活動、鼓笛隊活動を一生懸命させていただき、毎年の「こどもおぢばがえり」がとても楽しかったです。そんな中、同じ少年会活動のスタッフをしていた方とご縁を頂き、大島分教会で結婚式を挙げ、今度は夫婦での伏せ込みとなりました。

その人を通して

10年前の教祖百三十年祭三年千日活動2年目、大島の会長様より「教会の事情復興を夫婦で勤めて

ほしい。今まで通り上級の御用をしながら、会長を務めてもらいたい」と言われました。最初は驚き、子供も生まれたばかりで戸惑いもありましたが、夫婦で話し合いお受けすることにしました。

すると、ある信者さんが、「あなたたち夫婦が使ってくれるのなら、どうかこの土地建物を役立ててください」と、現在の教会をお供えしてくださいました。歴代の会長様、事情の中を繋いでくださった信者の皆様のおかげと、ありがたいう気持ちでいっぱいになりました。建物は手狭ながらも、私たち家族、教会に繋がる信者さん方と、新たなスタートとなりました。

就任奉告祭当日、大教会長様が教会前の住宅をご覧になって、「目の前に、にをいがけをする場所を与えていただいている。大いに励みなさい」と激励を頂きました。

そうして喜びいっぱいにスタートした奉告祭の、翌月の月次祭のことでした。前半下りが始まった頃、近所のおじさんが縁側の窓ガラスを叩いて、「うるさいからやめ

ろ！ 防音装置をつけろ！」と怒鳴りこんできました。その時は上級の会長様がおられたので対応していただき、その後は「窓を締め、鳴物は小さく叩きましょう」となりました。

それからの月次祭は、毎月窓は締め切って鳴物は小さい音で勤めることになりました。「おじさん1人のために、なぜここまで気を使わなければならないのか」と不足に思うこともありましたが、「これも、親神様がその人を通して何かをお仕込みくださっている」と思案し、どんな中も勇んで勤めるよう心掛けました。それから大きな問題もなく毎月のおつとめも無事勤めることができていました。

当たり前ではない

子供を2人授かり、長男が小学校3年生、次男が1年生となり、月次祭のときは鳴物も上手に勤めてくれていました。ところが昨年四月の月次祭のとき、座りづとめが始まった瞬間に、あのおじさんが玄関の扉を開けて入ってきて、

「防音装置をつけると言ったよな、迷惑をかけてるのが分からんか！よそ者がドンチャンしやがって」と怒鳴り込んできました。混乱しながらも「すいませんでした」と何度も頭を下げました。子供たちも驚いてわんわん泣き出し、私も含め信者さん方もその姿を見て涙を落としました。10年近く何事もなく勤めてこれたのに、年祭活動1年目にして再び見せていただいた節に、何をどう思案したらいいのか分からなくなりました。信者さん方とも相談して、みかぐらうたの音楽を流し、皆で総立ちでおつとめを勤めることにしました。

今後どのように勤めればいいのか、教会長として悩みながら、先輩先生方にも相談する中で、「教会の芯である私の心定めが第一だ」という思いに至りました。

そのおじさんからも逃げることなく、思いをしつかり伝えること、そしてまず私が真剣におつとめを勤めること。この思いを信者さんにも伝え、今年から改めて鳴物を入れて勤めようと心を定めました。

不安の声もありましたが、鳴物を入れて、無事に今年の春季大祭を勤めることができました。ほっとすると同時に、親神様、教祖が守つてくださったに違いないと思いました。

教え通りのおつとめができることは当たり前ではなく、ありがたいことなんだと、この節を通して感じる事ができました。これからもしつかり心を込めて、理の立つおつとめを心一つに勤めていきたいと思っています。

生きていてくれてありがとう

親神様は、子供の成長を通して親の成人を促されることも多くあるように思います。ある日、妻から「すぐに帰ってきて！」と電話があり、帰ると生後9カ月の長男が熱性けいれんを起こしていました。妻の身体はけいれんにより揺れていて、涙が子供の顔や身体にポタポタと垂れていました。頭が真っ白になりましたが、次の瞬間「おさづけしかない」と必死で取り次ぎました。柏手を叩くと同時

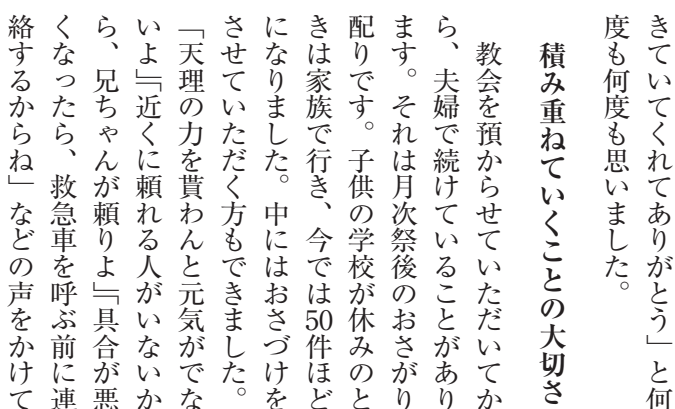
にガタガタ震えていたけいれんがピタッと止まりました。鮮やかな御守護に「ああ、教祖がお働きくださった」と実感し、感謝しかありませんでした。

また、次男の出産予定日まであと数週間となったとき、妻が病院で「羊水が足りないので絶対安静です、入院してください」と言われました。それから数週間して、無事に自然分娩で出産することができました。元気な泣き声が聞こえてホッとしましたが、低体重でしたので、すぐ保育器に入り、たくさんさんの管が繋がった状態でした。

入院となりました。夫婦交代で付き添いをして中、次男にも同じ症状が出て、病院に行くと同じ診断でした。まだ生後1カ月で、治療が難しく、ICUに運ばれました。主治医からは「身体が動く」と痰が溜まり、呼吸がでずに命を落とす危険性があります。体を固定して処置をします」と説明がありました。身体を固定するため次男の手足に重りを乗せ、人工呼吸器をつけました。面会は1日に2回、15分ずつでした。大島の会長様ご夫妻がおたすけに来てくださり、「子供の身上は大丈夫。夫婦で話してるか？ 神様が話し合う時間をつくってくれたんだね」と言われました。ちょうどその頃は、お互いの価値観の違いから話し合うことを避けていたような感じだったので、「なぜ知っているんだろう？」という思いと、「話し合えば子供たちがたすかるんだ！」という思いで、いろいろと話し合いました。そうするうちに1週間後に長男が退院、その2週間後には次男も退院となりました。「生

先に妻が退院し、毎日母乳を病院に持つて行きました。数週間後、規定の体重になったので退院となり、やっと家に帰って一緒に過ごせることを家族一同喜びました。

しかし1週間後、今度は長男が40℃を超える高熱を出し、再びけいれんがおこり、目の焦点もあわない状況でした。すぐさまおさづけをさせていただくと不思議とけいれんは治まりましたが、病院の診断は「RSウイルス感染症」で、



また、最近「子ども大喜び食堂」を始めました。夜に開催すること
も食堂で、毎回メニューはカレー
ライスですが、地域の高齢者や親
の帰りが遅い子供たち、また家族
で来てくれる方もおられます。ま
だまだ陽気ぐらしの道場にはほと
んど遠い歩みですが、今があるのは、
親々、信者さん方が大節の中も喜
び勇んで通ってくださったお陰で
す。これからもしっかりと上級へ
足を運び、地域に根ざした教会を
目指して歩ませていただきたいと
思います。

本年は大教会より「各教会が2
名以上初席者を御守護頂こう」と
仰せくださいます。この思いにお
応えできるよう、精いっぱい励み
ます。

四月月次祭										祭典役割		
胡 三 味 琴 弓 線			小 すり 太 拍 ちやんぼん 鼓 がね 鼓 木			地 方		てをどり		扨 者	扨 者	祭 主
瀧本基志枝			中村美津代			瀧本眞二郎		大教会長		山本義範	川畑澄博	大教会長
山本広子			吉田幸子			加世田洋		前 半		賛 者	賛 者	指図方
瀧本美奈			奥田千晶			奥田正儀		後 半		瀧本一太郎	岡本久昭	湯川正圀
川畑俊一			松林英也			榎川和人		新居里実		立花善三	竹内義忠	瀧本眞二郎

青年会芦津分会総会開催



4月21日、青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、大教会で総会を開催。青年会員82名が参加した。

本年から、6交替でのおつとめ。女鳴物は女子会の協力を頂き、一手一つに勤めた。

続く式典では、はじめに青年会長様のビデオメッセージ。続いて大教会長の祝辞。「大教会は年祭活動2年目の目標として、『初席者2名以上の御守護』を掲げている。青年会員も一人の人に声をかけ、おちびに連れて帰り、別席を運

び、おさづけ拝戴まで導いてほしい」と期待を述べられた。続いて井筒委員長が挨拶。

「ひのきしん隊が結成70周年を迎え、この旬に一人でも多くの会員さんに入隊してもらいたい。今年は従来の分会単入隊に加え、年齢や立場が近い会員同士で入隊できるフラット入隊で『会長後継者』『学生層コース』が設けられているので、是非活用してほしい」と、ひのきしん隊への入隊を会員に呼びかけた。

その後、あらかとよりよう指針を唱和し、青年会歌を斉唱。

式典第2部では、昨年からはめた「対話」を2人1組になって行った。

その後、食堂で直会。女子青年も合流し、ビンゴ大会を中心としたプログラムで、和気あいあいと楽しい時間を過ごした。

女子青年の集い

婦人会女子青年（井筒たつえ委員長）は、4月21日、青年会総会に合わせ「女子青年の集い」を大教会で開催、女子青年34名が集まった。



青年会総会のおつとめで女鳴物を勤めた後、陽気ホールに移動して式典。

婦人会本部からの御祝辞の後、井筒年子・婦人会支部長のお話。「女子青年は、心の思うままに行動できる若い力があります。陽気ぐらしの教えを、自信をもって周囲の人

に伝えさせていたくださましよう」と期待を述べられた。

続いて、井筒委員長が挨拶。「女子青年の活動が、皆さんにとつて教えるを学べる機会となり、お互いの意見を交換し、楽しい場となるよう、一緒に作っていききたいと思います」と今後の活動の抱負を述べた。

続いて、新たに婦人会員となった高校1年生の代表者による入会宣言の後、岩切寿代さん（島原）が感話を行った。

式典後は、青年会と合流し、食堂でアトラクション。この日のために練習したダンスを披露した。

また教祖誕生祭の前日17日には、教祖のお誕生ケーキを作成し、誕生祭当日朝に本部教祖殿へお献じさせていた。

ケーキ作りは、パティシエである荒木めぐみさん（恵庭分教会教人）が中心となり、女子青年5名で行い、旬の苺をふんだんに使った豪華なケーキが完成した。



井筒委員長は「3時間かかりましたが、楽しすぎて一瞬でした！荒木さんが作ったピッキー&リボンちゃんクオリティが高くて可愛かったです！」と語った。

婦人会支部の集い

4月19日、本部中庭を会場に、天理教婦人会第106回総会が執り行われ、全国各地から約2万1千人の婦人会員が参集した。

本部での総会式典後、婦人会芦津支部は、詰所大広間を会場に「支部の集い」を開催。



83名が参加した。

大教会長のお話の後、大広間と食堂を会場にねりあい。年祭までの通り方について語り合った。最後に井筒支部長が挨拶。年祭に向け、教祖にお喜びいただけるよう通ることを誓い合った。

第30回関東地区荻津会

4月14日、東京教務支庁で第30回関東地区荻津会を開催し、東京を中心とした関東在住のようぼく・信者ら25名が参加した。

午前10時、鳴物を入れて座

りづとめ、よろづよ八首を勤めた後、「論達第四号」を拝読。会員同士によるおさづけの取り次ぎ合いに続いて、濱口明子さん（日高）、弘瀬勇武さん（荻田町）が感話を行った。その後、全員でおてふり練習。全員で和やかに昼食をし、勇んで歩むことを誓い合って散会した。



道の後継者の集いⅢ

スタッフ研修会

4月17日、道の後継者の集いⅢ実行委員会（井筒敏成委



員長）は、午後12時30分より、大教会陽気ホールで「道の後継者の集いⅢスタッフ研修会」を開催し、12名が参加した。「道の後継者の集い」は18歳から48歳までの荻津に繋がる若者を対象に、この夏から3回に分けて開講する予定であり、若者がお互いに語り合うグループワークに多くの時間を割いている。

研修会は、はじめに山田道弘育成部長より開講挨拶。その後、参加者は2班に分かれ、実際に行われるグループワークを体験した。今回は、「自分のできるおたすけの実践と、

そのきっかけとなる気付き」に重点を置き、班付きスタッフとして務めるメンバーが、実際にグループワークを体験する中で、気付いたことを活発に出し合った。

海外帰参者歓迎会

4月12日から21日までの日程で、コロナ禍より5年ぶりとなる台湾からの団参が実現し、真明彰化教会（洪克明会長）と真明新營教会（陳惠卿会長）から合わせて37名が帰参。その内、12名が初席、2名が中席を選び、2名がおさづけの理を拝戴した。

17日夜には、海外部（瀧本眞二郎部長）主催の歓迎会が、天理市内の飲食店で開催された。世話人・井筒文夫役員の乾杯の音頭で会食がスタート。井筒ふみ子前会長夫人も列席され、和気あいあいとした雰囲気の中、盛況裏に終えた。

学生会新入生歓迎会

4月28日、荻津学生会（森

道治委員長）は、新入生歓迎会を詰所で開催。

この日は学生参拝デーとあわせて活動が行われ、管内学生を中心に、高校生9名、大学・専門学校生12名、少年会員3名、学生担当委員7名の計31名が参加した。

午前11時、参加者は本部北礼拝場に集合し、三殿を参拝。回廊拭きひのきしんを行い、本部神殿で勤められるお願いづとめに心を寄せた。

詰所に移動後は、大広間を利用しレクリエーションの後、昼食は4班に分かれバーベキューで親睦を深めた。



事情はこび

立教187年4月26日お許し

書間分教会

任命・神殿増築

六代会長

元木 慎一 37歳



平成17年おさづけの理拝戴、
21年徳島大学卒業、29年修
養科第915期修了。本部電算
課で8年勤めた後、大教会
青年を務めた。徳島教区三
好支部学生担当委員。
就任奉告祭 6月2日

鳥栖分教会

任命

五代会長

加藤 仁 34歳

平成20年おさづけの理拝戴、
23年琉球大学中退、22年修
養科第828期修了。本部営繕
部営繕課で2年、建築課で



4年勤め、布教の家福岡寮
に入寮。その後、大教会青
年、会長宅青年を務めた。
青年会芦津分会常任委員。
就任奉告祭 6月16日

会長室報

本部勤務辞退

【青年会ひのきしん隊】

吉田 真也（今津原）

【ひのきしん寮】

谷上 由樹（眞一）

本部勤務

【婦人会本部】

畠山 由羅（芦玉）

【さおとめ寮】

木村 里香（芦明德）

教務部報

教人資格講習会第140回修了

井内 豊明（徳修）

洪 里美（真明彰化）

立教187年4月10日

おさづけの理拝戴《3月》

水田 一成（末宝）

竹内 大樹（稗島）

陳 星好（真明彰化）

浜田 翔（直轄）

〈拝戴日順 4名〉

初席《3月》

〈3名〉 東大屋、明道

〈2名〉 明慈、兵庫眞洲、芦

浪、鎮名

〈1名〉 芦名、島原、加津佐、

島長、島百合、芦島

鶴、日幡、紀内、稗

島、鷺洲、大島、芦

沖

〈順序運びより 26名〉

教会長登殿参列《3月》

森 昭治（明慈）

三原 守雄（芦明眞）

今川 聖一（東津）

坂井佐代子（冷水）

平石 尚代（吹田）

今川 保（東迎）

今川 和子（多津）

大西 直喜（上郡）

松下 孝吉（上池）

小角 正二（脇町）

永見眞理子（脇西）

森内 富雄（天保山）

原田 晃雄（笠戸）

中原 等（笠松）

吉田 幸子（芦東）

梶川 和人（和鎮）

今村壽雅子（鎮恵）

以上17名

月例統計（自令和6年1月1日～至令和6年3月31日）

項 目	初	の	修	教
名 称	席	理さ	養科	人
大 教 会 (1)	4	7		
東 津 (13)	3			
吉 野 川 (29)	4	1		
島 原 (16)	10	1		
日 方 (15)	4	1		
稗 島 津 (7)	3	1		
本 日 津 (2)				
始 良 (2)				
津 和 (5)				
門 司 (6)				
當 別 島 (26)	2			1
沖 縄 (3)	1			
尼 崎 (2)	1			
四 ツ 山 (5)				
大 冠 (2)				
島 下 山 (1)				
天 保 山 (3)				
青 木 山 (1)				
芦 浪 (1)	2			
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	6			
勝 明 (1)		1		
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (1)	2			
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)	3			
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	3			
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)				
眞明彰化 (2)		1		
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	50	13	0	1